玖波中だより

No.14

大竹市立玖波中学校　令和５年１２月１５日

学校教育目標「自他を大切にし，主体的に考え行動できる生徒の育成」

発行責任者　小田　大介　　文責　藤川　健二

大竹警察署長賞「誹謗中傷が奪うもの」井上友里さん

「『青少年の非行・被害防止』並びに『社会を明るくする運動』作文・ポスター・標語コンテスト」において，３年生の井上友里さんの作文「誹謗中傷が奪うもの」が大竹警察署長賞（作文の部）を受賞しました。

みなさんは SNS をよく使っていますか？ ユーチューブやツイッター，LINE，インスタグラムなどスマホは日常生活の中で欠かせないものになっています。私の学校でも約八割はスマホやアイパットを持っており，LINE でやり取りをしたり，動画を見て楽しんだりと SNS はとても便利なものです。しかし，そんな便利な SNS を使って悪用する人もいます。その中でも私は特に誹謗中傷について考えました。

まず，誹謗中傷とは相手の悪口を言ったり，根拠のないデマを言いふらしたりして人を傷つけることです。誹謗中傷が多いのはツイッターや LINE，ユーチューブなどで，毎年誹謗中傷で亡くなった人が後を絶ちません。最近は，りゅうちぇるさんが自殺したことがニュースで報道され，その一つの原因として考えられるのが誹謗中傷でした。

なぜ，こんなにも被害者が出ているのに誹謗中傷は無くならないのか，いろんな記事を読んで考えました。無くならない原因の一つ目が「匿名」です。「匿名だから大丈夫」，「いつでもコメントは消せる」という考えからやる人が多いことが分かりました。また，「一人」に対して「集団」で攻撃するので，「自分は正しい」という間違った正義感があることも一つの原因だと思いました。誹謗中傷をした理由という記事の中には「その対象が嫌いだから」，「日常のストレスのはけ口」などが書いてありました。

ネットの世界は匿名だけで相手は見えません。「死ね」，「気持ち悪い」そんな暴言の数々を一人の対象に向かって集団で言い続け，何が面白いのでしょうか。その人が自殺したら違う人を探してまた暴言を書き続けるのでしょうか。きっとそんなことをする人は心が痛まずにやっているんでしょう。確かに，暴言を書く対象の人を実際にナイフで刺して殺したわけじゃありません。それに，自分だけじゃなくて他にもたくさんの人が言っていたから罪悪感なんてないのかもしれません。でも，誰かも分からない，会ったことがない人達から一気に暴言を言われ続けた人はどんな気持ちだったでしょうか。「嫌い」「ストレスのはけ口」そんな自分勝手な理由で誹謗中傷を受け，自殺した人の周りの人達はどんな思いだったのでしょうか。「実際にナイフで刺したわけじゃない。」でも，誹謗中傷をされた人は自殺しています。自殺するぐらい苦しくて，苦しくて，日々過ごすのがしんどくて，怖くて，「気にしない」と思っても気にしてしまって，どうすればいいのか分からなくなって，疲れてしまう。これは立派な犯罪ではないですか？

誹謗中傷さえしていなければ，その人は生きていて周りの人達と笑って過ごせていたんじゃないですか？例え，どれだけ誹謗中傷をした人が反省しても後悔しても過去は変わりません。自殺した人が苦しんだ日々やその周りの人達の悲しい想いや怒りは消えません。だから，やめましょう。こんなにも悲しいことがこ

れ以上起きないようにみんな頑張りましょう。この社会の中，苦しいことや理不尽なことが起きても誰かにあたるんじゃなく，周りの人に話したり自分なりにストレスを発散したりして，誹謗中傷を減らしていきましょう。例え，ほんの少しの変化でも積み重ねていけばきっと救える命はあると思います。そして，誹謗中傷を受けた人は一人で悩んで抱え込むんじゃなくて信頼できる人に相談することが一番大切だと思います。また，警察の人やカウンセラー等に相談し，心に余裕が持てる場をつくることも大事だと感じました。

「便利で楽しい SNS」が「苦しみ，悲しい思いをする SNS」にならないようにするのがスマホを持つ人の義務だと思います。そして，その義務をちゃんと果たせるように私も頑張っていきたいです。

地域での体感・実感　～体験を経験に ～

ヤングスポット

過去の投稿は ぷんタッチ

祭に参加し助け合い体感

中学生　本山　鈴栁　14歳

私は初めて地元の玖波祭に参加しました。これまでは、見る側でしたが、やる側になって地域の人たちの優しさに触れました。

初めて「真榊台」を持ってみてすごく緊張をしたけれど、みなさんが、「頑張れ」などと応援してくださったのがうれしくて、また頑張ろうと思うことができました。

重く感じたり、軽く感じたりして大変でしたが、そのたびに、みんなと声をかけ合って安定して持てるように頑張りました。みんなと力を合わせてできたので、とても楽しかったです。

途中の休憩では、地域の人が家を休憩場所として提供してくださったり、飲み物や食事なども用意されていました。「足りなかったら言ってね」などと優しく声をかけていただき、私はありがたいなと思いました。

祭はみんなで助け合って行っていることを体感しました。これからも、いろいろな地域の行事に参加していきたいと思いました。

（大竹市）

ヤングスポット

過去の投稿は ぷんタッチ

美術館のありがたさ実感

中学生　矢吹　哲己　15歳

全校行事として、地元大竹市に今春オープンした下瀬美術館に行きました。僕は行くのは2回目だったのですが、1回目は雨が降っていたので、庭やテラスが見られませんでした。この行事で、学んだことは二つあります。

一つ目は、美術品の美しさです。それは、「美術品といえば」と尋ねられれば、ただ単にきれいとしか思い浮かびませんでした。でも、美術館へ行って見れば、ただ単にきれいだけでなく、どんな点が美しいのかが、分かるように思いました。

二つ目は、美術館のありがたさです。それは、美術館があることで地域の憩いの場所となったり、市外の人に来てもらったりするなど、メリットは大きいです。地元の人や美術の好きな人の楽しみが一つ増えると思いました。

また、美術館には美術品以外、景色や美しい庭などいろいろなものが詰まっています。地域にとって大きな存在になるのではないかと感じています。

（大竹市）

経験とは体感・実感・体験したことをこれからの人生や生活に活かすことなり。